

名古屋芸術大学グループ 通信

30
January
2015

学校法人名古屋自由学院創立
60周年記念事業

第九

Feature

名古屋芸術大学オーケストラ
第32回定期演奏会



Close up! NUA-ism

～進化する「名古屋芸大」のDNA
NUA-OB
大きなやりがいを感じています
岩田和樹
NUA-Student
デザイン学部 デザイン学科
ヴィジュアルデザインコース 3年
森 美奈子

News/Topics

ニュース&トピックス
大学総合
■ 芸大祭とミニオープンキャンパスが開催されました
音楽学部
■ サウンド・メディアコース深田 晃氏による
公開講座が行われました
■ 第37回定期演奏会が行われました
■ ジャズ・ポップスコース主催
ギタリスト 黒沢 豪公開講座が行われました
■ 名古屋芸大学生による
ユーフォニアム・テューバコンサートが行われました

人間発達学部
■ 特別公開講座 津金 美智子氏
「これからの質の高い幼児期の教育を考える」が
開催されました

美術学部・デザイン学部
■ 2014年度
アート&デザインセンター企画展
「SHOBU STYLE～工房しよぶの仕事～」展が
開催されました
■ 旧加藤邸アートプロジェクト2014
「記憶の庭で遊ぶ」が開催されました
■ 名古屋帽子協同組合・ネーム刺繍組合
×名古屋芸術大学
尾張名古屋職人展の中でファッションショーが
行われました
■ 2014年度「シヤチハタ×名古屋芸術大学」
新しいスタンプの印面デザインに挑戦

名古屋芸大グループ校特集
■ 名古屋芸術大学保育・福祉専門学校

コラムNUA
恐れる力
美術学部教養部会講師 西村和泉

Master Artist

マスターアーティスト
理性と情熱
大学院音楽研究科 教授
広報企画部長
作曲家
田中範康

Information

インフォメーション
■ 出版
■ 2014年度 音楽学部 演奏会スケジュール
■ 美術学部・デザイン学部卒業制作展
大学院修了制作展
■ 2015年度入試日程



名古屋芸術大学グループ

<http://www.nua.ac.jp>

■ 名古屋芸術大学 / 大学院: 音楽研究科 美術研究科 デザイン研究科 人間発達学研究所
学部: 音楽学部 美術学部 デザイン学部 人間発達学部
■ 名古屋芸術大学保育・福祉専門学校
■ 名古屋芸術大学附属クリエ幼稚園
■ 滝子幼稚園 ■ たきこ幼稚園
■ 名古屋音楽学校(名古屋芸術大学 サテライト)



第

学校法人名古屋自由学院創立



九

60
周年記念事業



名古屋芸術大学オーケストラ
第32回定期演奏会

昨年、本学、名古屋芸術大学の設置母体となる学校法人名古屋自由学院が、創立60周年を迎えました。これを記念し、12月に日本特殊陶業市民会館にて、名古屋芸術大学オーケストラにより記念演奏会が開催されました。例年行われている定期演奏会の一環ではありますが、通常とは異なり、音楽学部のOB、OG、関係希望者の合唱への参加、またロビーにおいて、本学をはじめとする名古屋自由学院所属教育機関の、幼稚園児、学生、教員、職員たちが、それぞれの施設で作成したアート作品の展示、普段は東キャンパスに飾られている立体作品、西キャンパスに收藏されているデザイナーズチェアなどがロビーに持ち込まれ演奏会を華やかに彩りました。この創立60周年記念事業について、今回の特集ではご紹介いたします。

- 指揮／古谷誠一
名古屋芸術大学名誉教授
セントラル愛知交響楽団 正指揮者
- ソプラノ／加地早苗
- アルト／飯森加奈
- テノール／加藤利幸
- バス／伊藤貴之
- 管弦楽／名古屋芸術大学オーケストラ
- 合唱／名古屋芸術大学第九合唱団
音楽学部声楽コース学生を中心として、学校法人名古屋自由学院在籍学生、理事長をはじめ全教職員、またOB・OG、歴代関係教員からの参加を求め結成された、60周年記念のスペシャル合唱団です。
- 合唱指導／山田正丈

総勢177名の名古屋芸術大学第九合唱団。合唱団がステージに登場すると、ステージ上はオーケストラと合わせ300名近くにも。第四楽章に入ると、いよいよボルテージは最高潮。OB、OGである4名のソリストたちの歌声、そして合唱へ……。迫力のある演奏と歌声に、会場は魅了されました。



ロビーには、コラージュ作品、立体作品、デザインチェアなども並べられ、さながら美術館の雰囲気。開演までの間、多くのお客さまが足を止め、作品に入っている姿が見られました。ビジネスコースの学生スタッフや、教員たちと談笑する先生方の姿もあり、終始、和やかな空気に包まれていました。



創立60周年を迎えて

学校法人
名古屋自由学院

理事長
川村 大介

平成26年12月
4日木曜日夜、雨
が上がったもの

寒い中、日本特殊陶業市民会館フォレストホール（名古屋市民会館大ホール）において、名古屋自由学院創立60周年記念事業が行われました。この事業は、名古屋芸術大学オーケストラによる第32回定期演奏会「第九」の演奏に加えて、総合芸術大学の強みである美術デザイン系の作品を展示し、同時に滝子とクリエの幼稚園児も協力して「フロッタージュ（こすりだし）」と「コラージュ（貼り付け）」の作品を足

元に展示し、学院全体が参加して楽しんでいただけのような企画でした。当日は実に多くの方々がお越しになり、迫力ある第九の合唱や作品をお楽しみいただけたと存じます。

今回の企画は、芸大に勤務する卒業生の職員が中心となり、卒業生のソリストと連絡を取り、卒業生や在学生などで編成された合唱団、オーケストラとの練習やスケジュールの調整を行い、美術学部やデザイン学部の作品の選考・調整、美術学部学生と滝子幼稚園やクリエ幼稚園の園児たちとの制作の準備を行うというものでした。「ALL名芸」の合言葉のもと、名古屋芸大グループの関係者だけではなく、多くの方に参加していただき開催することができました。この場をお借りしまして感謝申し上げます。

現在の混沌として先の見えない不透明な時代に、名古屋自由学院は、将来を担う子どもたちのため、芸術を愛し芸術の深奥を極めようとする若者のため、若者たちが持っている「感性

「創造力」といった無限の力をもって、未来ある子どもたちに最善の教育環境を提供し、人々に感動を与え、様々な社会問題の解決に真摯に向き合う人材を養成する教育機関を目指しております。

時代は変わりましても、この理念は60年前の昭和29（1954）年に創設者「水野鈔子」先生がおっしゃられた建学の精神でございます「至誠奉仕」から脈々と本学院に受け継がれてきたものでございます。

学院創立60周年は、人間で申し上げますと「還暦」を迎えるわけでございますが、社会が不透明な中で、教育機関として在るべき姿について、建学の精神に立ち返り、自ら考え、更に永続的な教育機関として発展させていく所存でございます。

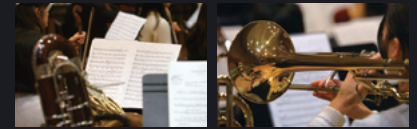
引き続き、本学院に対しまして、皆様からのご指導とご鞭撻の程お願いいたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

Concert

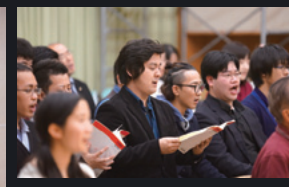
BEETHOVEN
Symphony
No. 9



本番2日前（12月2日）のオーケストラ練習。夕方6時過ぎから、それぞれの授業、仕事を終えてから、東キャンパス2号館 大アンサンブル室に集まり練習開始。すでにクオリティも高く、調性と確認作業に費やされていました。張りつめたような緊張感が印象的。



同日、同時刻、4号館多目的ホールで行われた合唱練習の風景。こちらはオケ練習とは打って変わって和やかな雰囲気印象的。年齢も立場も異なる人々ながら、チームワークを感じさせる姿が見受けられました。休憩中は笑い声が聞こえるものの、いざ歌が始まると、皆、真剣そのもの。



オール自由学院、オール名芸を旗印に

■総勢270名の壮大な演奏会

今回の記念事業は、2014年になってから急遽、企画されたもの。一般的なホテルのレセプションだけではなく、新しい発想と名古屋芸術大学をはじめとする名古屋自由学院を象徴するような「これまでにない記念事業にしてほしい」という理事長の強い意向もあり、大学の職員を中心として構成される実行委員で案が練られるところから始まりました。芸術を通して社会に貢献する学院の姿勢をアピールすることを目的に、定期演奏会を所属する学校すべてで盛り上げようと考えられました。

定期演奏会の演目は、もともと年の瀬という

こともありベートーベンの交響曲第9番に決まっていた。それならば、合唱団を広く募集し、参加を募ることはできないだろうか、とアイデアが転がり始めました。「1万人の第九」をはじめとする日本各地で行われている一般公募による大規模な合唱団のイメージもありました。一方で、今回の記念事業はオール名古屋自由学院というコンセプトもあり、合唱団の募集については、一般公募ではなく、OB、OGと学内関係者のみで募集が行われました。また、指揮の古谷誠一名誉教授、合唱指導の山田正文氏の「芸術大学の演奏会としてクオリティーは落としたい」という要望もあり、「原語で歌うこと、暗譜すること」を条件に募集されま

した。最終的には、総勢177名の合唱団になりました。第九を初めて歌う卒業生、昭和の時代に卒業された方、声楽にかかわっていない音楽学部の先生、音楽にかかわりのない美術の先生、人間発達の学生、美術の後援会の方々、学生のご両親などなど、様々な方々に参加いただくことになりました。177名の合唱団に、いずれも本学出身のソリスト4名、オーケストラ92名、総勢270名ほどがステージに上がり、壮大な演奏会となりました。

■ロビーを彩る作品たち

演奏会を盛り上げるようなかたちでロビーに

Lobby-Foyer

Frottage Sculpture Design chair



会場となった日本特殊陶業市民会館フォレストホールのロビーの床に並べられたフロッタージュとコラージュの作品『学び舎の記憶』。お客さまの中には、東キャンパス、西キャンパス、幼稚園、保育・福祉専門学校とそれぞれの作品をじっくり鑑賞される方もいらっしゃいました



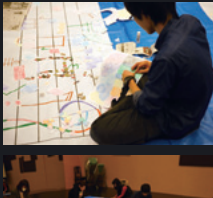
会場でながされた制作風景の映像に見入る方々。制作の意図やアイデアをスタッフに確認し、感心する声も聞かれました。はしゃいでいた子どもたちが、やがて熱中して行く様子は、見ていてほほえましいものでした。



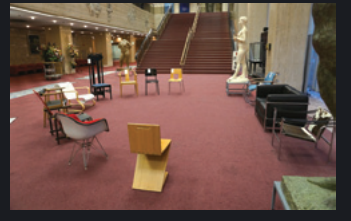
東キャンパスから運び出されるのを待つ立体作品たち。フォレストホールのロビーに飾られた立体作品は、普段、東キャンパスに置かれ、音楽学部、人間発達学部の学生を見守っている作品です。



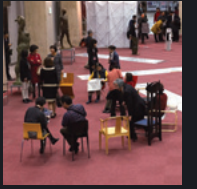
音楽学部で行われたフロッタージュとコラージュ作品の制作風景。普段は、使わないはさみと糊に悪戦苦闘！？非日常を楽しみました。夕方から制作が始まり、学生、教職員、空いた時間に入れ替わり立ち替わり訪れ、制作しました。



滝子幼稚園での制作風景。大はしゃぎで国内の壁、床をこすりだす園児たち。こすりだした後、五線譜をかたどった和紙ロールが広げられると、子どもたちは切り貼り作業に熱中。創作に対する姿勢は、大人も子ども変わりません！



デザインチェアの一画は、人気スポットに変貌。はじめは遠慮がちに座り心地を確かめていたお客さまでしたが、気に入った椅子が見つかったと深く腰を下ろし、本当にリラックスしているようでした。



「学び舎の記憶」は、制作者ごとの微妙な違いを感じられるものになりました。貼り付けられたフロッタージュや書き込まれた内容を、注意深く読み取るお客さまたち。

は様々な作品が飾られました。中でも、名古屋自由学院に所属する教育機関で製作された「フロッタージュとコラージュ『学び舎の記憶』」は、それぞれに印象的な作品となりました。学院の幼稚園児、学生、教員、職員たちが、それぞれ園舎、キャンパスの壁や床、凹凸のある部分を、色鉛筆やクレヨンなどで紙にこすりだし（フロッタージュ）、それらを、五線譜をかたどった和紙ロールに自由に貼付け「記憶のかたち」として完成させました。はじけるような元気のある幼稚園児の作品、音楽への愛情が感じられる音楽学部の作品、さすがに専門分野と思わせる美術学部、デザイン学部によるまとまりのある作品、それぞれの作風に個性が感じられ興味

深いものとなりました。のべ約300名の学生、園児、教職員らによって制作されるその過程は、映像作品となって当日も上映されました。

ロビーには、普段、東キャンパスに飾られている立体作品、西キャンパスX棟に収納されているデザイナーズチェアも運び込まれ展示されました。通常であれば簡素なロビーが、さながら美術館に変貌し、多くのお客様がこれらに足を止め見入る姿が見受けられました。

■次へのステップ

演奏会は、会場がほぼ満席となる2,000名以上の来場者を迎え、盛大なものとなりました。

一体感のあるオーケストラ、ソリスト、合唱団の演奏に加え、ユニークな展示作品、ビジネスコースの学生たちが務める会場スタッフ等々、オール名古屋自由学院にふさわしい事業となりました。実は今回の60周年記念事業は、始まりの最初のステップにすぎません。第1回目のパイロット事業としての位置付けであり、今後、第2段階、第3段階へと規模を大きくしていくことが構想されています。6年後の名古屋芸術大学設立50周年を目処に、次なるステップをより大きなものへと発展していくことが構想されています。

Close up!

進化する「名古屋芸大」のDNA

NUA-ism



毎回、たくさんの拍手をいただき、時にはお礼のお手紙をいただくこともあります。そういったことも、やりがいになっていますね。



演奏は、愛知県内のいろいろな場所です。午前中は、朝から移動して、午前中は演奏、帰って来たら勤務時間内は訓練です。逆に午前中に全体で訓練して、午後から演奏に出かけることもあります。交番勤務の頃は、休みの日に楽器を練習しようかなって思うのですが、逆に音楽隊になってからは、毎日すぐ吹いていますので休みの日にはしっかり休んでいます。

大きなやりがいを感じています

名古屋城の三の丸、官庁街にある愛知県警察本部からさらに外堀通を越えたところ、県警本部別館にお邪魔した。愛知県警察音楽隊は、現在この別館で訓練などを行っている。以前は『愛知県産業貿易館』として使われていた建物で、ちょっと古いオフィスビルといった佇まいである。受付に出迎えてくれたのは、制服姿も凛々しい警察官。なぜか、こちらの背筋も伸びてしまう。

自衛隊や警察、消防など、吹奏楽のバンドを持つ官庁はいくつかある。聞けば、全国の各都道府県警察に音楽隊が編成されているのだそうだ。音楽家と言えば、どちらかと言えば、規則に縛られたくない自由な生き方を指向する人。かたや警察官や自衛官と言えば、規律に厳しい世界。音楽家？警察官？音楽隊の活動はどんなもの？？？率直に伺ってみた。

「全国には皇宮警察と47の都道府県警察全てに音楽隊が編成されていますが、このうち多くは一般の警察活動の傍らで音楽隊活動を行っておりまして、演奏活動のみを専門に行っているのは愛知県を含めておよそ10隊ほどです。愛知県警察の音楽隊は現在40名の警察官で編成されていますが、そのうち10名は演技を担当するカラーガード隊『フレッシュ・アイリス』ですので、演奏に携わるのは30名です。音楽隊は警察本部の広報課に所属していて、広報活動の一環として愛知県下の地域のイベントや小学校などで防犯や交通事故防止を呼びかけて、年間約200ステージをこなしています」年間200ステージ！音楽隊の舞台を見かけたことのある学生も多いのではないだろうか。YouTubeなどにも個人が撮影したたくさんの動画がアップされている。小気味のいい演奏が印象的だ。30名のメンバーは、音楽隊を志望し、オケマンのように欠員とオーディションによってメンバーになっているのか、採用について聞いた。「音楽隊専属として採用というのは、愛知県の場合ありません。まず警察官採用試験に合格して、警察官になった者の中から音楽隊員として選抜されます。ですから現在音楽隊員として勤務している者も、最初はみな警察学校に入校して



大学ですと本番に向けて、何カ月も練習して演奏会を迎えることとなりますが、音楽隊はほぼ毎日が本番で、1日に2回ステージがあったりすることもあります。そのことが勉強になりますね。

警察官として現場に出るための教養や訓練を受け、次に交番やパトカーなどの勤務を経て、人事異動により音楽隊に入っています。名古屋芸大の出身は、私で4人目かな。音大出身者ばかりでなく、一般の高校や大学を卒業して警察官になってから、音楽隊を志望して加わる人もいます

岩田さんの場合は、もともと自衛隊のバンドに入りたいと思っていたそうだ。ユーフォニアムという楽器は、オーケストラの編成には無い。そういった事情から、楽器を続けるために官庁バンドという吹奏楽団に加わることは、現実的な選択肢であった。「自衛隊は、プロのオーケストラと同じで、空き要員がないと入れないと聞いていました。それで悩んでいる時に学生支援課で『明日、警察の説明会があるよ』と聞き、これだと思い、行ってみました。また、ちょうど愛知県警察音楽隊の演奏もあり、その時の副隊長に話を聞かせていただいたんです」説明会は3月、採用試験は5月。2ヶ月あまりの短時間で、採用試験のための勉強をした。「説明会の次の日に、学生支援課で資料をもらって、問題集を何冊か借りて何とかかりました(笑)。私はちょっと準備不足だったかもしれませんが、もう少し準備ができればいいと思います」採用試験には、教養、論文のほか、体力測定もある。試験では、腕立て伏せやシャトルランなどの測定を行うが、特に高い身体能力が求められるわけではないと言う。ただし、試験に合格した後、警察学校でしっかりと鍛えられるのだそうだ。学生時代、特に運動をやったことなかった岩田さんは、「最初のころは周りについていくのがやっとだったんですが、それでも気合いで何とかかりました(笑)」と笑顔で語ってくれた。



演奏のジャンルは軽いものばかりなので、時々クラシックをやりたいと思うこともあります。大きい演奏会だとオーケストラの編曲曲をやったりします。ちょっと気合い入りますね。

Vol.61 NUA-OB 岩田和樹

(いわた かずき)
愛知県警察本部 総務部 広報課
音楽隊 ユーフォニアム
巡査長



1987年 愛知県生まれ
2010年 音楽学部演奏学科卒業
2010年 愛知県警察本部
警察官 拝命

警察に入ってから、体を鍛えることも、法律を勉強することと同じように職務に必要なものの一つと考えるようになりました。最初、筋トレにはまって、今ではフルマラソンを走れるほどまでになりました。

平成26年 愛知県警察音楽隊
「ふれ愛コンサート」より



「公務員という安定した職業の中で思う存分音楽と向き合えるというのが官庁バンドの大きな魅力だと思っています。特に警察官という『堅い』職業に就いていることで、両親も安心していただいていると思います。学生時代の友人にも羨ましがられますよ(笑)。もちろん、フリーで成功すれば公務員よりも全然金銭的にはいいのかもしれませんが、そこは考え次第でしょうね……」実際に交番勤務の時代には、犯罪者や酔っ払いと対峙したり、犯罪現場の立入規制や交通整理のため冬場の夜半に立ちっぱなしになるなど、厳しい仕事の側面もあるが、同時にやりがいを強く感じるとも言う。「警察の仕事は一般市民の皆さんの幸せを願い安全・安心な暮らしを守るとい、金銭には置き換えることのできない誇り高くやりがいのある仕事だと思います。時にはつらいこともあります。それ以上に感動することもたくさんありました」警察官として、業務にも誇りと使命感を感じていることが伝わってくる。「音楽隊の仕事は、『音楽を通じて犯罪や事故を減らす』という、これまで培った自分の音楽的スキルも生かすことができ社会にも貢献できる素晴らしい仕事です。もちろん、昇任や人事異動により他の警察部門へ転勤することもありますので、ずっと音楽隊で勤務できるわけではありませんが、音楽隊を除隊した後に他の部門で警察官として活躍している方もたくさんいます。私も最初は音楽隊に入ることが目標でしたが、今は将来的にサイバー犯罪を取り締まる仕事に就きたいと考えています。犯罪の被害を少しでも減らすために自分に今何ができるのかを、いつも考えています」一層の思い入れを感じさせた。



Vol.62
NUA-Student
森美奈子

(もり みなこ)

デザイン学部 デザイン学科
ヴィジュアルデザインコース 3年

「大学に入る前の頃からのことを聞きたいんだけど、まず、どうしてデザイン科へ？」

小さい頃から絵を描くのが好きだったんですけど、それがベースにあって、直接的には高校3年の時に、地元の絵画やポスターのコンクールで、3位に入賞したことが大きいですね。高校の時は美術部で部長をやってきましたが、入賞してこっちの道に進んでいけるのかなと思うようになりました。それから、考えることと絵を描くことの両方が好きだったので、この二つを同時にできるような仕事がないかなと、そういうことでデザインの道に進んでみようと思えました。

「考えることと絵なんだ。ほかの道、例えば、画家だとか、アニメーターだとか、考えなかった？」

ありますよ。ただ、アニメーターは大変だと聞いて



第5回ポスターグランプリコンペティション
「伝える革命」 グランプリ受賞

コンペティションのテーマである「伝える」を表現するため、著名作ドラクワの「民衆を導く自由の女神」に着想を得たオマージュ作品として発表しました。鮮やかな色彩と、意力の伝わる構図に詰めたアイデアを評価していただいたのだと思います。



「ふれあいバスがある街 津島市」

「身近なバス」を感じてもらえるよう「津島と風土とバス」をテーマにしました。実際にはこのようなイベントはないのですが、楽しさや親しみを感じてもらえるスタンプラリーにしました。津島市に何度も足を運び、スタンプをデザインしました。作り込みをぜひ見て欲しいですね。

考えることが楽しい



スマートフォン利用
(活用)シーン
デザインコンテスト
「Go home with
a SmartPhone」

スマートフォンをよく活用するシーンとして考えたのが電車。通勤・通学が、スマートフォンによって楽しい時間に変わっていることをわかりやすく伝えようと思いました。



「23rd Save Me Poster Exhibition 2014」

「絶滅寸前の動物達を守りたい」というテーマで企画された展覧会に出展した作品です。私は鳥類たちが住処を奪われ続けていることに注目し、まるで踏み荒らされた後の様なポスターを撮影しました。薄暗い雰囲気と実際に使用されている羽根がポイントです。

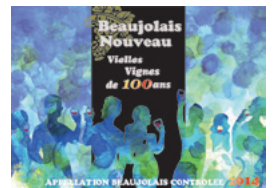


「極北の海展」

こちらは空想上の展覧会を元にしたDM課題です。私は水族館での「北極の海」展を企画しました。「気泡」と「雪の白」を基調にしたバブルの中に神秘的な動物達が泳いでいる作品です。



「カレンダー春夏秋冬」



「ヴォジョレーヌーヴォー2014
ラベルコンペティション」

ていたので、それは考えなかったですね。どちらかという、社会学とかそういった方面にも興味がありました。もしかしたら、そっち方面の大学に行っていた可能性もありますね。

「名古屋芸大に行こうと思ったきっかけは何だったの？」

入試のためにデッサン教室へ通っていて、その時の先生に、名古屋芸大以外にもここがいいんじゃないって3つの大学を紹介していただいたんです。それでオープンキャンパスに行き、実際に見てみたんです。その時点では、デザイン科に行こうと思っただけでしたが、まだちょっとふわっとしてました。名古屋芸大は1年生の時にファウンデーションがあるので、その間に決めてもいいのかなと考えて選びました。あと、選んだ理由はもう一つあって、「勤」なんです。ほかの大学も見に行きましたが、名芸は、なんか居心地がいいというか、勤としか言いようがないんですけど「ここがいいんじゃないかなあ」と思ったんです。なにか明るく感じました。うまくやっていけそうな気がする、そんな感じですね。

「さて、絵を描くことと考えることをやりたいと思って来たけど、今はどう？ どちらに興味がある？」

私はまだ、好きか嫌いかで考えちゃうんですけど、今は考えることの方が好きですね。それで、つい考えることの方に時間を割いてます。最近では、先生にも「もっと表現を磨けるといいよね」と言われてまして、もっと表現や技術を上げていきたいと取り組んでいます。こういう学科にいる以上は、ちゃんと磨いていかないとだめだなあ、と感じています。

「考えることはそれほど苦労じゃないの？」

いいアイデアが出てくるまでは、大変ですね。情報収集したり、こういう傾向があると調べたり分析することは好きなのでそこは苦ではないんですけど、そこから消費者や受ける側というか、デザインを伝える立場の人にどう届けるか情報をまとめて絞っていく過程で苦労します。ポンと抜けるようなアイデアが出てこない時は、つらいですね。

「卒業したらどうする？」

まだ、ぼやっとしてるんですけど、最近是一般職もいいかなあと。でも、グランプリ獲ったんだしやっぱりこっちがいいかなと、揺れてるんですけど、どっちにしても考える仕事をしたいんです。一般職だなんて言わないでよ！ デザインの仕事やろうよ(笑)



大学総合

芸大祭と ミニオープンキャンパスが 開催されました

名古屋芸術大学の学園祭「芸大祭」が昨年も華やかに行なわれました。本学にとって地域の方々の触れ合いや交流の場であり、学生たちにとっては、待ちに待った年に一度のお祭りとして、2014年10月24日(金)の前夜祭から、26日(日)にかけ、東西両キャンパスを上げて大いに盛り上がりました。

東キャンパスは音楽学部と人間発達学部が担当。『異常起笑』をテーマに、2号館1階に設けられたメインステージでは、総勢22組のバンド演奏などが披露され、会場から熱い声援が送られました。また、屋外ステージでは、大道芸やダンス、仮装大会といった愉快的な催しで来場者を楽しませました。他にも、家族で体験できる企画展が数多く用意され、小麦粉を使った工作やお絵かき部屋、巨大迷路

といった、チビッツたちでも楽しめるプログラムがファミリーにも人気でした。

一方の西キャンパスは美術学部とデザイン学部が担当。『どんぱっち』をテーマに、100を超える模擬店や企画展でキャンパスが埋め尽くされました。なかでも、本格的な料理やカフェが楽しめるフードブースやオリジナルアクセなどの物販ブースに、来場者の注目が集まりました。また、各学部・コースの作品展示にも大勢のギャラリーが訪れ、熱心に作品を鑑賞していました。

L棟の特設ステージでは、恒例の外來イベントが催され、名古屋で結成されたダンス・エレクトロ・ロックバンド「white white sisters」と6人組のアイドルユニット「バンドじゃないもん!」が登場。この2組をひと目見ようと、遠くから本学までお越しいただいた方も多かったようです。

なお、先回好評を博した「ミニオープンキャンパス」が、今回も26日(日)に同時開催されました。両キャンパスに設けられた各学部の相談コーナーや、音楽学部が主催するピアノ・フルートなどの「ワインポイントレッスン」に、多くの高校生が参加。通常のオープンキャンパスでは体験できない、



- 1 東キャンパスの模擬店
- 2 8号館で行われたリズム体操(東キャンパス)
- 3 屋外ステージのダンス発表(東キャンパス)
- 4 西キャンパスの模擬店
- 5 キャンパスにはコスプレヤーがいっぱい
- 6 ミニオープンキャンパスの様子(東キャンパス)
- 7 ミニオープンキャンパスの様子(西キャンパス)
- 8 西キャンパスASDセンターの展示作品



学園祭ならではのパワーと熱気を肌で感じていただけたのではないのでしょうか。本年3月7日(出)に開

催される音楽学部のオープンキャンパスにもぜひご参加ください。お待ちしております。

音楽学部

サウンド・メディアコース 深田 晃氏による 公開講座が行われました

2014年10月30日(木)、本学東キャンパス2号館の大アンサンブル室で、音楽学部 音楽文化創造学科 サウンド・メディアコース公開講座「これからの時代に求められる音楽制作と録音について」が開催されました。本講座ではステレオやサラウンド、ハイレゾリューションオーディオなど、様々な技術革新によって現在に至る録音技術について学び、これからの音楽制作や録音のあり方について、講師の深田 晃氏よりレクチャーを受けました。

深田氏はCBS/SONY(現Sony Music Entertainment)録音部チーフエンジニア、NHK放送技術制作技術センター番組制作技術部チーフエンジニアを歴任され、数々のCD制作及びTV番組制作に携わってきました。また、サラウンド録音の研究では、1997年にニューヨークのAESコンベンションで「Fukada Tree」を発表し、

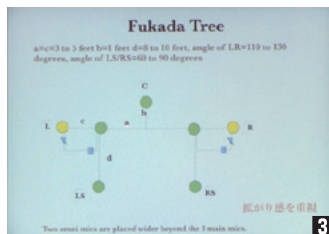
様々な文献で紹介されています。

深田氏は講座を始めるにあたり、「普段皆さんが何気なく耳にする音楽は、視覚的なイメージも含め、気持ちで聴いていると言ってもいいでしょう。しかし、録音するということは、マイクが電気信号を捉えるのみで、その気持ちまでを記録することはできません。また、指揮者の位置にマイクを置けば、バランスの良いオーケストラ録音ができるかと考える方もみえますが、実際に録音してみると決して良い音とは言えません。良い録音をするためには知識と想像力が必要です。さらに、録音のセオリーを知っていれば、求める結果へといち早く到達でき、時間を節約することが可能です。まさに、録音は科学だとも言えます。」と、録音の持つ本質について説明されました。

講座前半では、ステレオやサラウンドといった、マイク録音の基礎と技術解説が行われました。現在の一般的な録音はステレオ録音です。ステレオで録音された音を聴く際には、左右のスピーカーとリスナーが正三角形で結ばれるの



- 1 深田 晃氏と担当教員の長江和哉准教授
- 2 受講者の質問に答える深田氏
- 3 深田氏の発表した「Fukada Tree」のセッティング解説図
- 4 講義の様子



が理想。ただし、正三角形の頂点で聴けない場合も多く、リスニングポイントによっては、音楽ソースの位相がズレて聞こえます。録音の際にはこのズレの補正が必要です。また、マイクで録音できる範囲をレコーディングアングル(録音角)と呼び、目的の録音物に対して、レコーディングアングルに沿ったマイクの間隔と角度を

決めることも重要です。他にも、マイクセッティングにはAB方式、XY方式、ORTF方式などがあり、録音する対象と各方式の特性に応じたマイク間隔や録音角など、適切なマイクセッティングが求められます。

一方、左右にセンターとリア2本を加えた、5.1chスピーカー配置が基本のサラウンドにも、各種

方式があります。サラウンドは空間的印象が重要視され、音源の広がり感と包まれ感の構成と録音方式がポイントになります。マイクの使い方も、楽器音と響き音を組み合わせるタイプと、楽器音や響き音が最適に録音できるポイントを探すタイプがあります。深田氏は、「録音方式は録音環境や録音対象によって選択を検討すべ

きで、方式に囚われることなく、各方式の特性を理解したうえで、美学的価値判断で選択しましょう。」とアドバイスしました。

後半では、ホールやスタジオでの録音方式の違いや、ストリングス・シンセサイザー・パーカッションなどのサンプリング音源を用いたサラウンド録音など、実際の音源を聴き比べながら解説が加

えられました。また、新しい録音技術として、重層的な考えをベースにした「マルチレイヤー」や「マルチチャンネル」、デジタル音楽配信を背景にして注目される「ハイレゾ配信」などについても紹介されました。

本講座のまとめとして、「ハイレゾリューションオーディオなどにより、音楽をより良く伝え、音

楽の本質に迫ることができるようになりましたが、そのスペック以上に、音楽自体のクオリティが求められる時代です。技術やテクノロジーは日々進化していますが、全ての基本である音楽を作ることや気持ちを伝えることは、これからは変わらないことはありません。」と伝え、深田氏はこの講座を結びました。

音楽学部

第37回定期演奏会が行われました

2014年11月20日(木)、名古屋市中区の三井住友海上しらかわホールで、名古屋芸術大学音楽学部の第37回定期演奏会が開催されました。

本学音楽学部は、指導方針の一つとして、学生は毎日の練習とレッスンを受けるのみでなく、舞台での演奏によって、その成果と教育効果を格段に高めることができると考えております。その意味からも多くの演奏会を開催し、多くの学生が出演できる機会を作っています。

この定期演奏会は、学年を問わ

ずたくさんの学生が参加したオーディションによって選ばれた出演者によるもので、独奏・独唱の形態による各個人のすぐれた技術と感性を表現する演奏会となっています。

プログラムは、前半に、電子オルガンからピアノまで9名の学生が、休憩を挟んで後半は、まず1名が作品の発表を行い、その後、テノールからクラリネットまで8名の学生出演、合計18名が独奏・独唱を披露してくれました。ピアノ伴奏は主に、卒業生や院生が担当しました。

緊張しながらも、専門的な修練と音楽表現の成果を精一杯披露する学生たちに、会場から暖かい拍手が送られていました。



音楽学部

ジャズ・ポップスコース主催 ギタリスト 黒沢 豪 公開講座が行われました

2014年11月13日(木)午後、東キャンパス2号館大アンサンブル室において、音楽文化創造学科ジャズ・ポップスコース主催によるギタリスト黒沢 豪氏の公開講座が行われました。

黒沢豪氏は、日本語と英語の完璧なバイリンガルであるのを武器に、ロサンゼルスを拠点としてアメリカ西海岸全域で音楽活動・作曲と編曲・音楽教育・通訳活動、そして音楽大学等でのゲスト講演やミュージックセミナーに励んでいます。彼の音楽は、日本とヨーロッパそしてアメリカの異文化を自然に融合させた音の結晶と言えます。特筆すべき強みのひとつは、色彩豊かなソロギター奏法で、それはメロディー・ドラム・ベース・DJ・琴も入ったフルバンドを思わせます。ステージ上であろうとレコーディングルームであろうと同じ。さらに、長い歴史のあるフラメンコに10年以上興味を持ち続け、フラメンコの最強で史上最も「熱い」12/8拍子「プレリ

ア」をレパートリーに加えることに成功しています。

公開講座は最初に、ジャズ・ポップスコースのダニー・シュエッケンディック教授から挨拶があり、本日の出演者、BeartraxのKai Kurosawa氏と、drumsのChuck van Haecke氏が、そして、黒沢豪氏が紹介されました。

黒沢氏は講座の視聴者に対して「楽器のことなど何でも聴きたいことがあれば、後で質問してください。今日は一緒に楽しみましょう」と話され、早速、演奏に入りました。

最初の曲の演奏後、その曲の解説がありました。「自分で作曲した曲ですが、インプロビゼーションが入っています。ジャズのイントロに即興を入れ、ロックのリズムを加えています。また、作曲のテクニックとしては、4拍子のリズムの中に3拍子を加えるなどしています。皆さん、分かりましたでしょうか？」と視聴者に質問していました。

次に、楽器の説明に移り、Kai Kurosawa氏が使用している楽器「ベアトラックス」について、黒沢氏から紹介がありました。ベアトラックスの機能や使い方につい



1 オープニング演奏。左から黒沢豪、Chuck van Haecke、Kai Kurosawaの3氏
2 曲や楽器の解説講義をする黒沢豪氏
3 ベアトラックスの機能や使い方について語るKai Kurosawa氏
4 出演者を紹介するジャズ・ポップスコースのダニー・シュエッケンディック教授
5 休憩の合間に楽器の指導を受ける視聴者たち

てはKai氏自らがイントロ演奏しながら詳しく解説してくれました。彼は、2000年頃からやわらかい音の出るこの楽器を使用しているとのことで、左手が発達して両手利きになったと話していました。

この後、曲を演奏して、その曲の解説、会場からの質問の受付といった内容で講座が進められまし

た。途中、休憩時には、視聴者が楽器を直接手にして、ゲストの3名から楽器の説明や演奏の指導を受ける機会もありました。

ギターの高音とベアトラックスのやさしい音色、ドラムスの迫力あるビートが織り成すジャズ&ロックの演奏に、しばし、時を忘れて聞き入っている視聴者の姿が印象的でした。

音楽学部

名古屋芸大学生による ユーフォニウム・テューバ コンサートが行われました

2014年11月6日(木)、名古屋市熱田区の熱田文化小劇場で、本学音楽学部のユーフォニウム・テューバ専攻生による「ユーフォニウム・テューバコンサート」が開催されました。

このコンサートは今年で7回目を迎えました。担当教員の柏田良典テューバ講師と幡野武ユーフォニウム講師の指導のもと、出演のメンバー一同が、どのようにすれば自分たちが普段学んでいるものを楽しく伝えることができるかを考え、企画し、来場者に少しでもユーフォニウム・テューバを身近に感じていただくことをめざして、合宿や強化練習を経て、積

み上げてきた成果を披露するために行われました。

今年も、ドラムやパーカッションが入るなど様々なアンサンブルを取り入れることにより、ユーフォニウム・テューバアンサンブルの幅広さを感じていただけるような内容で構成されていました。

プログラムは、第1部が、M. グリム作曲の「歌劇<ルスランとリユドミラ>序曲」(戸田 顕編曲)、J. シューラー作曲の「チェロキー」、伊藤康英作曲の「ユーフォニウム・フォー・ユー」、G. ホルスト作曲の「吹奏楽のための第2組曲」(塚田 隆雄編曲)の4曲で、それぞれユーフォニウムとテューバのアンサンブルや、ユーフォニウムの4重奏で演奏されました。

第2部は、J. スティーヴンス作曲の「パワー」、R. デューハー

スト作曲の「パナシェ」、P. スモーリー作曲の「クール組曲」が、そして、最後は、バリトンやパーカッションなども加わり、教員と学生が一緒になってG. ガーシュウィン作曲の「パリのアメリカ

人」(近藤慎充編曲)を合奏し、終演となりました。

熱演した演奏者に対して、中高生を中心として会場を埋めた来場者から大きな拍手が送られていました。



人間発達学部

特別公開講座 津金 美智子氏 「これからの質の高い 幼児期の教育を考える」が 開催されました

人間発達学部が主催する津金美智子氏 特別公開講座「これからの質の高い幼児期の教育を考える」が、2014年11月1日(土)、ウィルあいち(名古屋市東区)で開催されました。

津金氏は名古屋市各所の幼稚園長を歴任し、平成22年より文部科学省初等中等教育局幼児教育課教科調査官、国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官を務め、平成26年から文部科学省初等中等教育局視学官を併任されています。

会場には、人間発達学部の学生をはじめ、卒業生や幼稚園・保育所・子ども園の先生など、大勢の方が来場されました。

前半は平成27年4月よりスタートする、子ども・子育て支援新制度「幼保連携型認定こども園」の

教育・保育要領のあらましについて、後半は質の高い幼児期の教育の考え方についてお話をされました。

新制度では、従来からの「幼保連携型」「幼稚園型」「保育所型」「地方裁量型」といった類型を、「幼保連携型認定こども園」単一の施設とし、内閣府が所管することに改定されます。また、「幼保連携型認定こども園」は、学校と児童福祉施設の性格を有することとなります。

津金氏は、この新たな「幼保連携型認定こども園」の基本的な考え方、策定の要点、ねらい、配慮事項などについて詳しく解説され、その中で「子育てを巡る様々な課題のひとつに、大都市の待機児童問題や地方の急速な少子化の進行などがあります。新制度では、この待機児童の解消や地域の保育支援など、保育の量的拡大・確保に関心が集まっていますが、大切なのは、質の高い幼児期の学校教育・保育の総合的な提供による子育て支援を行うことです。」と説明されました。



1 津金 美智子氏



2 会場の様子



3 子どもたちのエピソードを伝える津金氏

後半では、糸編みや色水遊びなど、津金氏が訪れた幼稚園で実際に経験した、子どもたちの遊びを通じた微笑ましい4つのエピソードを紹介されました。

これらのエピソードでは、遊びを通じた活動で、子どもたちの心が感じ取る幼児期の学びを、しっかりと受け止めることが教師・保育士・幼稚園教諭にとって重要だと伝え、幼児一人ひとりの内面にひそむ芽生えを理解して伸ばし、幼児が主体になって活動できる環境を計画的に設定する専門的な能力が求められているとしま

した。
最後に、これから教育の現場に向かう学生たちへ「子どもたちはとことん遊ぶことで、いろんなことに気づき、数や量のこと、ひらがなのこと、読み書きのことを体験から学びます。それはやがて科学的・論理的な思考力へとつながっていきます。その芽生えの姿が遊びの中にはたくさん含まれています。どうか遊びを大事にしてください。」と伝え、この講座を結びました。会場からは大きな拍手が送られました。

美術学部

2014年度 アート&デザインセンター企画展 「SHOBU STYLE ~工房しょうぶの仕事~」展が 開催されました

アート&デザインセンターが主催、美術学部アートクリエイターコースが企画した「SHOBU

STYLE~工房しょうぶの仕事~」展が、本学西キャンパスアート&デザインセンターで、2014年11月7日(金)~11月19日(木)に開催されました。

「しょうぶ学園」は鹿児島市にある知的障害者支援センター。「nui project」の名で流通している刺繍が施された服や2012年にアパレルメーカー「nico and ...」

のCMで流れた事で一躍話題に上った音楽パフォーマンス「otto&orabu」など、数多くのプロジェクトを企画し各方面から注目を集めています。各々の行為から生まれてくる思いがけない表現、心の動き、行動の全てを「個性」として尊重し、サポートする事で、しょうぶ学園は他では真似できないカタチを創りだすことに成功し

ています。
今回アート&デザインセンターでは、このしょうぶ学園の各工房で制作された作品と商品を一堂に展示し、会期中には「工房しょうぶ」のコーディネーターで、しょうぶ学園の統括施設長(園長)でもある福森 伸氏の特別講演や施設利用者を招いての刺繍ワークショップ、2014年制作のドキュ

メンタリーフィルム『so:bu[t and]=1.2.3.4』の上映会などが行われました。

●2014年度美術学部特別客員教授特別講演「僕はほくでしかないのに どう変われと言うんだろう」

11月7日(金)実施

会場：本学西キャンパスB棟大講義室

今回の企画展に関連し、2014年度美術学部特別客員教授を務めるしょうぶ学園の福森氏による特別講演が行われました。講演で福森氏は、今回の作品展と作品を制作した知的障害者と呼ばれる「彼ら」(福森氏曰く)について次のように語りました。

「以前は、知的障害を持つ“彼ら”を、健常者だとする“私たち”の側に引き寄せようとしていました。それが正しいことだと信じて疑っていませんでしたが、彼らにとって本当に幸せなことではないことを理解し、彼らの価値観に寄り添うよう私たちが変化した結果、彼らのユニークで素晴らしい作品の数々が生み出されるま

かけになりました。しかし、彼らは作品を展示してほしいと願ってはいません。彼らは造形する行為自体が目的で、できあがった造形物はその結果でしかありません。この作品展では、自由に価値観の広い彼らにしか作ることができない造形に、ある意味不自由な私たちが触れ、価値観の狭さや常識・普通という言葉や意識に縛られる“自分自身”と対峙することだと考えます。知的障害者の問題とは、健常者と呼ばれる私たちの側にあり、『変われ！ 変われ！』と言う私たちに、自分らしく生きる彼らは『何が変われと言うんだろう？』と感じていることでしょう。本当に変わるべきは私たちの意識ではないでしょうか。これからも、彼らにとっての“普通”を広めていきたいと考えています。」

●刺繍ワークショップ「イトエマキモノモノガタリ」

11月11日(火)～14日(金)

会場：本学西キャンパスG202 (アートクリエイターコース実習室)

一人あたり約1.5mの巻物に、



1 2 『SHOBU STYLE ～工房しょうぶの仕事～』展の展示作品
3 しょうぶ学園 統括施設長 福森 伸氏
4 2014年度美術学部特別客員教授特別講演の様子
5 講演の後にギャラリーで行われた「オープニングパーティ」では、福森氏自ら音楽パフォーマンスも披露



それぞれのスタイルで、それぞれの物語を刺繍する糸巻「イトエマキモノモノガタリ」を4日間かけ制作しました。できあがった「イトエマキモノモノガタリ」は、アート&デザインセンターに展示されました。

●ドキュメンタリーフィルム「so:bu[t and]=1.2.3.4」上映会

11月8日(土)

会場：T.A.G IZUTO (名古屋

市・栄)

2014年に制作されたしょうぶ学園のドキュメンタリーフィルムで、上映会では、福森氏とイワタシ子氏 (NPO法人「I have a dream」代表) による対談も行われました。また、11月11日(火)、14日(金)、18日(火)の3日間、本学西キャンパス B棟大講義室でも上映されました。

美術学部 デザイン学部
旧加藤邸 アートプロジェクト2014
『記憶の庭で遊ぶ』が
開催されました

明治時代に建てられた国登録有形文化財『旧加藤家住宅』は、日本の民家や生活様式の伝統が息づいています。ここには北名古屋市が運営する『回想法センター』が併設され、市民の記憶を喚起する様々な活動が行われています。

この建物や庭に名古屋芸術大学の学生・卒業生、教員がアート作品を展示する「旧加藤邸アートプロジェクト2014」が、2014年11月15日(土)から11月23日(日)まで開催されました。

テーマを『記憶の庭で遊ぶ』とし、各自の芸術を探究する学生や卒業生たちが、この旧加藤家住宅という場から触発された発想やイメージを、どのような造形として

この場の記憶を新たにすることを目的とした展覧会です。

今年度は、美術学部、デザイン学部、音楽学部から18組が出品しました。

オープニングセレモニーが初日15日(土)の午後2時から会場で開かれ、陶芸・彫刻・ガラス・インスタレーションなど今回出展しているアーティストによるトークが行われました。

毎回行われている音楽パフォーマンスは、11月16日(日)、夕日がやさしく差し込む午後3時半から、音楽文化創造学科音楽療法コースの学生・卒業生、教員有志によって、はなれ北・南の座敷と茶室を使って厳かな雰囲気の中で行われました。

プログラムは、前半に6曲「(調和) (ちいさい秋みつけた) (この素晴らしい世界) (茶室即興) (十三の砂山) (津軽じょんがら節)」が演奏されました。



休憩を挟んで後半は、ボーカル曲を中心に7曲「(異邦人) (北風小僧の寒太郎) (竹田の子守唄) (なんにもない部屋) (風) (東京ブギブギ) (愛燦餐)」が熱演されました。

庭園に取り囲まれた純和風の建物の中で、周囲の雰囲気にマッチ

した音楽の調べに、訪れた人たちはしばし時を忘れて聞き入っていました。

開催期間中はご近所の人たちを中心に大勢の来場者があり、伝統的な日本家屋の様式や展示された芸術作品を楽しんでいました。

デザイン学部
名古屋帽子協同組合・
ネーム刺繍組合×
名古屋芸術大学
尾張名古屋職人展の中で
ファッションショーが
行われました

名古屋市中区栄の「オアシス21 銀河の広場」で、第31回尾張名古屋職人展が2014年9月26日から28日まで3日間行われ、その中で、27日午後にはファッションショーが開催されました。ファッションショーには、本学デザイン学部テキスタイルデザインコース

の3年生がデザインした刺繍帽子が会場に、そのデザインコンテストも行われました。

今回の産学連携事業は、本学と名古屋帽子協同組合・ネーム刺繍組合の協同企画で、テーマは『春夏秋冬』、帽子の形はキャップでした。学生たちは、名古屋帽子協

同組合から提案されたキャップから形を選び、帽子に刺繍する『春夏秋冬』の柄をデザインしました。

このようにして、産学協同事業で制作された帽子のファッションショーには、テキスタイルデザインコース3年生全員がデザインした帽子が会場に登場しました。

ショーの中で行われたデザインコンテストの結果（1位～3位）と受賞者のコメントは以下の通りです。

■1位:池田麻理子(いけだまりこ)「秋散歩」

つばには木目を、クラウンには紅葉した葉をあしらって、まるで秋の山路を歩いているかのような帽子をデザインしました。風が吹けばザワザワと、一歩歩けばサクサクと、秋の音が聞こえてきそう帽子のつばの裏には、ミノムシが見え隠れしているのもポイントです。

■2位:山下真実(やましたまみ)「花冠」

モチーフはシロツメクサです。帽子ということで、頭の上に乗せる物なので花冠をイメージしたデザインを考えました。生地は芝生や花畑をイメージする物にし、全体的に柔かく優しい春らしい物を

選びました。

■3位:林 知美(はやしともみ)「和花『桔梗』」

最近、夏に咲くことが多いですが古くから秋の七草の一つとして愛されてきた桔梗。清楚で和を感じる花です。そんな桔梗を花と葉、蕾に分け一定の大きさで並べることで今どきのポップなイメージを加えつつ、全体を秋らしい茶色にし、桔梗本来の清楚で古風なイメージを残したデザインにしました。そして上から見ると桔梗が咲いているように見える様に刺繍がしてあり、自分も花になった様に感じるようになりました。

また、尾張名古屋職人展の期間中、名古屋帽子協同組合のブースでは、今回デザインされた帽子の中から、制作コストや市場性に優れている作品が再生産され販売されました。販売されたのは池田麻

理子さん、熊井優香さん、西郡竜生さん、林知美さん、永井見奈さん、織部裕理子さんのデザインした帽子で、彼女たち自らがブース

で接客しながら販売しました。

期間中大勢のお客さんが訪れ、帽子を手にとったり、被るなどして品定めしていました。



1 熊井優香さんの帽子「家出鹿のとある夕方」
2 大橋真季さんの帽子「フクブク」
3 デザインコンテスト 1位池田(中)2位山下(右)3位林(左)
4 デザインした帽子をかぶって記念写真
5 名古屋帽子協同組合のブースで帽子を販売する学生たち

デザイン学部

2014年度

『シヤチハタ×名古屋芸術大学』 新しいスタンプの 印面デザインに挑戦

昨年で5回目を迎えたシヤチハタ株式会社との産学連携活動「シヤチハタ×名古屋芸術大学」。スタンプ・文具等の国内大手メーカーであるシヤチハタの協力を得て、デザイン学部ヴィジュアルデザインコースの3年生たちが、昨年9月から若年層への利用拡大をテーマにしたスタンプ、及び印面のデザインに挑戦してきました。

9月30日(火)には、講師にシヤチハタ株式会社海外企画部長の清水孝洋氏をお招きし、商品企画を行う上で重要なコンセプトメイクやターゲット設定などを学ぶ特別講義を受講しました。また、10月7

日(火)には、同社商品企画・開発部の坂井 満氏による「印面制作に関する技術、書体について」の講義も受講。学生たちはこれら2回の講義の内容をふまえて、約1ヶ月を目途に作品の制作に取り組みました。

この間、担当講師のアドバイスをを受けたり、試行錯誤しながら作品をまとめ、11月4日(火)には、名古屋市西区にあるシヤチハタ株式会社本社で、学生たちが考えた作品のプレゼンテーションとその講評会が行われました。

講評会では、冒頭、本学担当講師の永井瀧登が、本プロジェクトのシヤチハタ株式会社への協力に対するお礼の言葉を述べ、その後、代表取締役社長の舟橋正剛氏より「今日は若い皆さんの個性あるアイデアをととても楽しみにしています。」とのお言葉をいただきました。



1 商品企画特別講義の様子(2014年9月30日 本学西キャンパス) 中央:永井講師、右:清水氏
2 プレゼンテーションの内容を聴きながら作品の審査をするシヤチハタ開発部の皆さん
3 作品のプレゼンテーションをする学生(2014年11月4日 シヤチハタ本社)
4 表彰式で賞状を受け取る学生(2014年11月25日 本学西キャンパス)
5 表彰式で一人ひとりの作品についてコメントをする清水氏

Column NUA No.27

恐れる力

美術学部教養部会講師 西村和泉

いま、妖怪がブームです。妖怪と聞いて私が真っ先に思い浮かべるのは『ゲゲゲの鬼太郎』と『妖怪人間ベム』なのですが、両作品のキャラクターたちは暗くて不気味だったため、兄につられて観た日の夜はトイレにも行けなかったほどです。特に『妖怪人間ベム』に登場する少年の姿をした「ベロ」はいつも孤独で、人間の子どもと何とか遊んでもらおうとするのですが、おさな心にも「それだけは勘弁して(笑)」とっていました。

彼らとは対照的に、『妖怪ウォッチ』の「ジバニャン」や『はなかつぱ』の「はなかつぱ君」は地縛霊や河童であるにもかかわらず怖さはみじんもなく、明るい場所できややかな仲間と囲まれています。『妖怪ウォッチ』の「友達契約」という言葉が象徴するように、現代の友情とは失敗を繰り返しながら「育む」ものではなく、「友達になろう」という宣言によって気楽に始めることができ、不都合が生じたら解消も可能な関係に近づきつつあるのかもしれません。とはいえ、大学時代に数少ない友人の一人から「友達やめるね!」と宣言された経験を持つ私にとって、そのような関係性の持つ怖さは底なしです(8月に真冬のコートを着

ていた自分が原因なので、何も言えませんでした)。そんな恐怖を知ってか知らずか、ブームの火付け役とされる小学生や園児たちは今日も元気に「ようかい体操」を行い、「ようかいしりとり」を口ずさんでいます。「ざしきわらし!しちほだ!だいだらぼっち!ちょうちんおぼけ!けらけらおんな!なきばあ!あまのじゃく!」というしりとり歌は、妖怪ソング特有の短調ではあるものの、「げっげっげげのげ〜」と比べると、「なにか得体のしれないものが出てきそう」な感じはなく、妖怪たちもマスコットのようです。日本の妖怪には、だいだらぼっちや海坊主など巨大系もいますが、どちらかと言えば小型で身近なものが多いの

この後、いよいよ学生たちのプレゼンテーションが開始。B3パネルにまとめたスタンプ印面デザインと、商品の使用シーン、利用環境などを審査員に積極的にアピールしました。

プレゼンテーションを受ける側の審査員は、シヤチハタの開発部署5名の方で『発想の斬新さ』や『印面デザインの仕上り』といったプランのユニークさ、デザインのコオリティーなどに加え、『企画の説得力』や『ターゲットは明確か、その規模は大きいか』、『ニーズの強さは、ニーズを満たすアイデアか』などといった視点から採点が行われました。

学生たちは、企業の方を相手としたプレゼンテーションに、緊張した面持ちながらもしっかりとした口調で説明していました。学生が持ち時間3分程度で一通り説明した後、審査員が質問をするといったかたちでプレゼンテーションは進められました。

その後、審査結果に基づく受賞者の表彰式と作品講評が11月25日、本学西キャンパスX棟で行われました。

シヤチハタ広報室山口氏からデザイン賞、シヤチハタ賞、最優秀賞の各賞が発表されました。

今回の受賞者は次の人たちです。

■デザイン賞

- 小河ひかりさんの「アロマスタンプ」
- 滝沢三紀さんの「せいちょうスタンプ」
- 時田実里さんの「今日はどんな日？こんな日！スタンプ」
- 丹山里穂さんの「スタンプ福笑い」

■シヤチハタ賞

- 遠山瑞希さんの「まる秘スタンプ」

■最優秀賞

- 池村美咲さんの「十二支年賀はんこ」
- 植地春実さんの「たのしい！おてつだいスタンプ」

シヤチハタ海外企画部の清水部長より受賞者一人ひとりに表彰状と賞金が授与され、受賞者から一言ずつコメントをいただきました。そして、入賞作品について清水氏から講評が行われました。

その後、入賞作品以外の講評も行われ、全ての学生に手書きのコメントを記載した用紙が配布されました。

「シヤチハタ産学連携活動」は昨年度で5回目の取り組みとなりました。この度もシヤチハタご担当者の親善的なご協力により、学生たちにとって大変有意義な連携活動となりました。

名古屋芸大グループ校特集

名古屋芸術大学 保育・福祉専門学校

本年度より本校でお世話になっております、加藤由美と申します。保育の現場で子どもたちと生活を共にしていた日々から、学生に“保育とは”“保育者とは”を教える立場となりました。どのように授業を進めていくとよいのかと、試行錯誤の毎日ではありますが、「保育を語る」ことを取り入れながら、奮闘しております。

保育は子どもの最善の利益を考慮して行わなければなりません。そのため、保育者自身の倫理観・人間性が求められます。そして、子どもを温かく受け止める心を持ち、専門的な知識や技術を身に付けること、さらにそれらを使いこなす力を磨くとともに、日々自身自身を高める努力をしなければなりません。最初からすべてのことができるわけではありませんが、自分自身を高めようという向上心を持つとともに、子どもの気持ちを理解しようと子どもの心に寄り

添うことのできる保育者になってほしいとの願いを持ち、学生の前に立っています。

授業では「乳児保育」「幼児の理解と教育相談」「保育・教育課程論」「保育実習指導I(施設)」を担当させていただいています。保育の考え方、子ども理解、発達の理解、保育実践のあり方、保育の計画の考え方など、どの授業も実際に保育をするうえで重要な内容になります。保育の難しさを感じてしまうこともありますが、ハイハイしていた子が自分で立ったり、大人の真似をすることを喜んでいた子が大人の思いとは違う自分の思いで行動しようしたり、自分の思いばかりを主張していた子が友だちの思いを聞こうしたり、一緒に考えようとするなど、子どもの成長を見ることは保育者にとってこの上ない喜びです。

また、子どもは、大人が考えないような言葉を口にしたり、理解できない行動をすることがあります。事例等をもとにグループワークなどを取り入れて、乳幼児の発達を理解し、どのような援助が必

要かを子どもの立場で考える機会も多く作っています。グループワークをすることで、多くの意見や考えを聞くことができたり、同じ思いを持っていることを確認したりできます。保育の方法や援助、支援などについては、その場その時の状況により、臨機応変な対応が必要ですが、考え方の基本をしっかり身に付けたいという対応が求められます。保育者として現場に立った時に、子どもが表す様々な思いや行動を受け止め、的確な援助ができるよう学びを深めてほしいと思います。

保育者が楽しく保育をすれば、子どもたちは心を動かし、楽しさを感じることでしょう。子どもた

ちがたくさん心を動かす経験や体験ができる保育をするためには、保育者自身が豊かであることが必要です。学生たちにはたくさん経験や体験をし、自分のキャパシティを増やして行ってほしいと思います。本校には同じ敷地内に幼稚園と幼児園(保育所)があるため、子どもたちを身近に感じることができ、保育者を目指す者にとって非常に良い環境です。この素晴らしい環境の中で一人前の保育者になるために学んでいる学生たちを心から応援し、学生たちの夢が実現するための一つの力になれるよう努力をしていきたいと思っています。

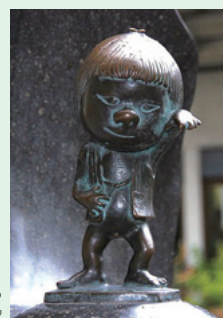


で、「かわいい」の感覚にも結びつきやすいでしょう。

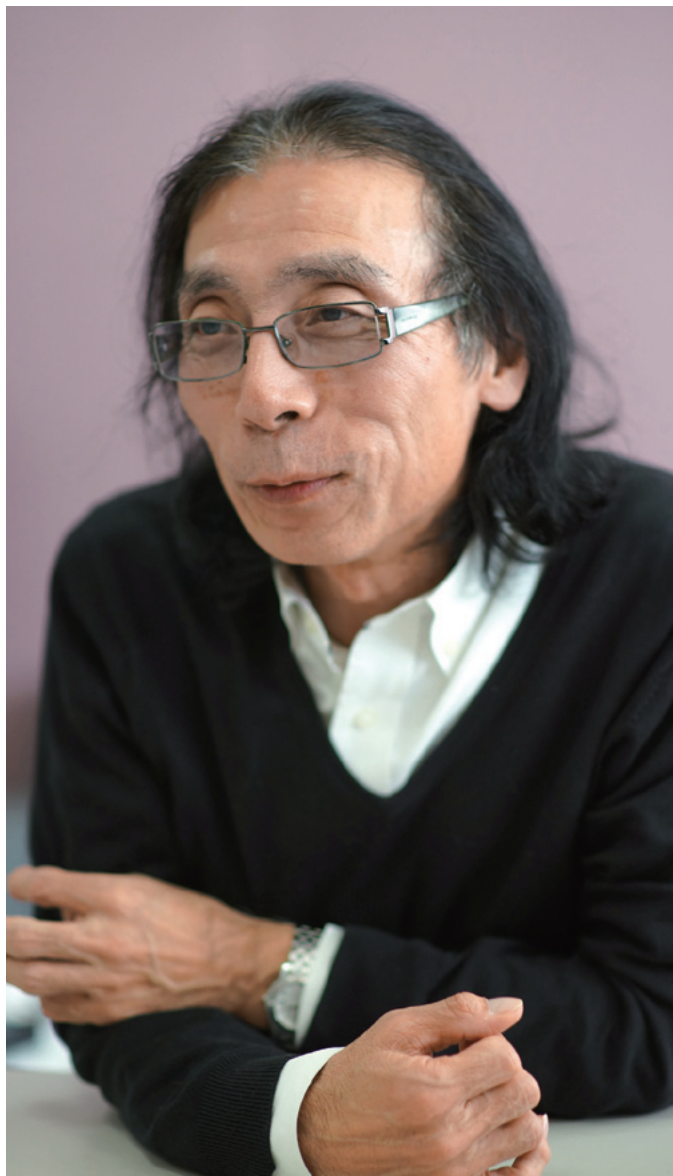
通常、小さいものは可愛らしいと考えられています。「かわいい」の語源として有名な『枕草子』の一節、「うつくしきもの 瓜にかきたるちごの顔」(可愛らしいもの。瓜に描いた幼児の顔)からも、日本人の小さなものを愛でる感覚が昔から変わらないことがよく分かります。私も若い頃はそのことをまったく疑っていませんでした。日本でもフランスでも、幼い子どもたちは本当に可愛くて、ずっと眺めていても飽きませんでした。しかし、自分の子どもが生まれてからというもの、「小さいものは本当に可愛いのか？」という根源

的な問いが、たびたび頭をよぎるようになりました。水木しげるの「座敷わらし」にそっくりな二歳の娘は、絵本を必ず破り、おもちゃを必ず力づくで壊し、食べ物と飲み物を器ごと投げとばし、あらゆるものに油性ペンで落書きをします。「やめなさい」と諭すと、さらに物を壊すが、地べたにうつ伏せになって、すねます。また、消しグムのことを「消しモグ」、パジャマのことを「チャガマ」、コップのことを「ポック」と言うので、「消しゴムだよ」と直すと、「ちがう。消しモグ！」とキレます。清少納言は二、三歳の女の子を「いとうつくし」と書いていますが、「魔の二歳児 いとおそろし」といった感じです。困った

ことに、最近の妖怪やおばけが怖くなくなってしまったため、「やんちゃな子には、おばけくるよ〜」の常套句が娘には通用しません。皆さん、妖怪よりも怖いものをご存じでしたら、ぜひ教えて下さい。



水木しげるロードにある「座敷わらし」像



3歳の時、近所に住むバイオリニスト（オーケストラのコンサートマスター）のところに習いに行ったのが音楽との出会い。小学2年でピアノを習い始めるが、バイオリンからピアノへ変わる数ヶ月間だけが楽器に触れていなかった期間という。音楽と深く結びついた人生。



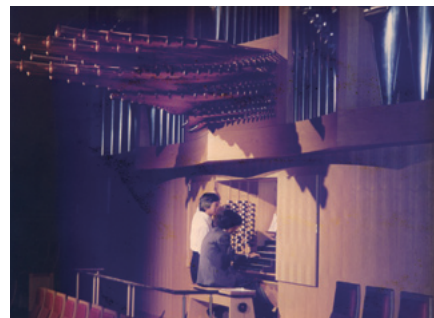
大学卒業後、作曲家として活動始める。学生時代の師の一人である、満上日出夫氏の元でNHK学校放送の音楽などの仕事を手伝う。先輩には作曲家の久石譲氏も。満上氏に呼ばれ二人で仕事を手伝うこともあった。



マスター ↑↓to アーティスト

【第27回】

< 理性と情熱 >



当時、国内には数台しかなかったパイプオルガン。作曲科を卒業後、器楽科へ学士入学して打ち込んだ。指を壊してしまっただけでは、演奏家としてもやってきたいと考えていた。

田中範康 大学院音楽研究科 教授
広報企画部長
作曲家

1952年 東京生まれ
1971年 国立音楽大学附属高等学校 作曲専攻卒業
1975年 国立音楽大学 音楽学部 作曲科卒業
国立音楽大学 音楽学部 器楽科(オルガン専攻)学士入学
1977年 国立音楽大学 音楽学部 器楽科卒業

音楽は、リズム、メロディ、ハーモニーの三要素から成り立つとされる。では、これらの要素の内、一つでも欠けてしまったら音楽と言えないのか？ そんな疑問に対し、答えの模索を行っているのが「現代曲（現代音楽）」である。現代曲は、20世紀初頭に始まる。そのころクラシックの音楽界では、新作は発表されるものの、実際に聴かれたり演奏されるのは過去の作品ばかり。新しさを求めてはいるが、ワーグナー、マーラー、あたりでそれまでの音楽理論に立脚した音楽（調性音楽）は完成し、それらを打ち破るような革新的な表現は行き詰まりつつあった。クラシック音楽と言うと、何百年も前の古典のような気がするが、例えば、マーラーの交響曲5番が1901年、プッチーニの蝶々夫人が1904年、ホルストの惑星が1916年……、ちょうど今から100年前と、近代になって作られた作品である。これらの古典的なクラシック音楽の次の時代に現れたのが、音楽の三要素から外れた「無調」（現代曲）である。

そして、その後、現在までの100年間、芸術音楽の分野では、年代ごとに扱う問題や音楽の在り方に微妙な差異はあるものの、現代曲（無調）の時代が続いているとされる。田中氏は、この流れの中にある作曲家であり、精力的な作曲活動を続けている。時として、混沌としていて難解とされる現代曲だが、その作曲者が考えることはどんなことなのだろう。

「今思えば、作曲のことを軽く考えていましたね。小学校6年の頃から簡単な作曲の理論のレッスンを受けていました。高校を受験する時に、その先生が『男だったら作曲なんかがいいのでは』と言ってくれて、後から思えば、それがきっかけの一つなんですよ」音楽家志望であった母親の意向で3歳からバイオリンを始め、小学生時代はピアノ、中学生時代は吹奏楽にのめり込んだ。「通っていた中学には、合唱部はあったのですが僕は歌が好きじゃなくて。それで、7、8人の友人と吹奏楽をやろうよと

始めて、3年生になる頃には40人くらいの編成になりました」ブラスバンドでは、トランペットとユーフォニアムを担当する傍ら、編曲をこなし、まとめ役として指揮をする立場になっていた。「当時は楽器も足りなくて、ならばということで生徒会役員の友達と連れだって学区であった世田谷区長に『楽器を買って欲しい』と陳情しました。話題になって、買ってもらいましたよ（笑）」部活では吹奏楽、個人ではピアノと音楽一色の中学時代を過ごし、音楽の道に進みたいと考え始めていたが、すんなりとはそう決まらなかった。「今のようない時代じゃないですからね。親にも反対されましたよ。中学校の担任にも『精神的におかしい』と言われて、親も学校に呼び出される始末（笑）」それでも、音楽をやりたい気持ちは変わらず、国立音楽大学附属高校 作曲専攻に進学する。ブラスバンドを編成し編曲を手がけ、区長に陳情する中学生となれば、非常に論理的な思考と情熱的な行動力を持つと言えるが、この一見、相

Chamber Music Vol1 1994

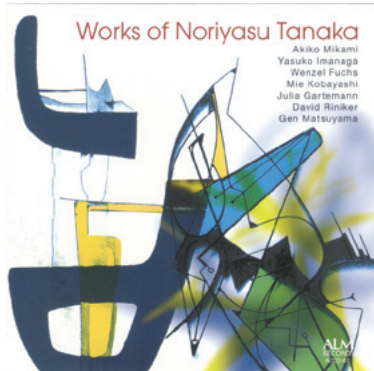


Sparkling in the Space I



「Sparkling in the Space I(残照の時)」はエレクトロニクスを用いた曲。大学にサウンドメディアコースができた時から、エレクトロニクスをどうやって自分の音楽に融合させるかということを考えていましたが、それをコンセプトに本作品を作りました。

Works of Noriyasu Tanaka 2011

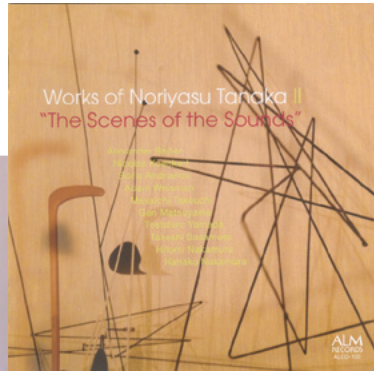


(ALCD-87朝日新聞推薦盤)

「言葉は悪いですが、モノマネというのが作曲の世界でもたくさんあります。ただのモノマネだけでそのまま使うのか、それをやっぱり自分の頭の中で取れんさせていくのか、大きな違いだと思いますね。作り手側として、それを素材としてどうやって扱っていくか、その考え方や姿勢が問われます。きっちり自分の中で整理できていれば、それはありかなとも思えます。ただ、そうならば、なぜその時代にそういうものがあつたのか時代背景などにも興味をわいてくるので、当然そこに頭がいくと思うんですね。それは本当の意味での理解だと思えます。単なる知識ではない理解」



Chamber Music Vol2 2002



The Scenes of the Sounds 2014



ピアノのためのモノローグ曲集より(第1番) 出版社：マザーアース 2014年11月新刊 3冊目の楽譜出版

Monologue Collection <No.1>



卒業後、作曲活動を開始、NHK-FM、アメリカ、韓国などの放送メディア、国内はもとより、ドイツ(ベルリンボン、ヴァッサーブルク)、オーストリア(ウィーン、ザルツブルク)、フランス(パリ)、北欧(コペンハーゲン、オスロ)、ベルギー(アントワープ、ルーベン)、アメリカ(ニューヨーク)、メキシコ(メキシコシティ、モレーリア)、韓国(ソウル、テグ、マサン)の音楽祭などで、作品が広く紹介されている。1996年、2002年にオーストリアVienna Modern Mastersレーベルから、2枚の室内楽作品によるCDアルバム、国内ではALM RECORDSから作品集をリリース。最新作は、昨年11月発売「田中範康作品集II『音の情景』」

反する2つの性質が田中氏に備わっているように思われる。

高校を経て、大学の作曲科に進学するが、作曲家としての道を目指すと同時に演奏者としての希望も捨てたわけではなかった。「大学に行ってピアノも専門的にやっていきたいとも思っていたのですが、パイプオルガンに興味が出てきたんですよ」当時、パイプオルガンは非常に珍しく、教会に設置されているものを除けば、国内に数台しかないものだった。オルガンがやりたくて、ここでも情熱的に動いた。「ちょうどアメリカから帰っていらしたオルガンの先生がいて、その先生に電車の中で、教えてくださいと入門ですね。僕は、当時練習用のオルガンを持っていなかったのですが、先生に断られたのですが、すぐには買えないものでないで、足鍵盤を紙に書いてね、それで練習したんですよ(笑)」作曲科を卒業後、オルガンを専攻するために学士入学をし、プレイヤーとしても研鑽に励んだ。しかし、ここで思わぬことが起こる。「オルガンに

移って1年目の時に指を壊してしまったんです。親指が麻痺して動かなくなる..... 当時は様々な病院でみてもらいましたが結局原因が分かりませんでした。今の時代、医学が発達して、過度な練習や、指の使い方が悪いために起こる神経伝達の障害で、フォーカルジストニア(局所性ジストニア)という難病があるそうなのですが、それだったのかなと思う事も有ります」フォーカルジストニアは現在でも治療の難しい病気の一つ。田中氏の場合、原因ははっきりしていませんが、いずれにせよ、「指を強くしようと重りをつけてトレーニングをしたりしていましたからね。そういう無理な事をしたのが指をいためた原因だったのだと思います」

指を壊すことになってしまったのは、エモーショナルな行動が行き過ぎた結果と言えるが、顧みれば、論理的な思考と情熱的な行動が、ない交ぜに行き来している学生生活が浮かび上がってくる。そして、その構造は、田中氏の音楽に、そのまま現れて



高校3年生の時のピアノ作品発表、ケネプロ風景。「日本の音大生は、楽器の練習は一生懸命やるのですが、いろいろな音楽に関する事、例えば、作品の構造がどうなっているのかとか、さまざまな時代の文化背景から影響される解釈だとか、そういったことを自発的に考えてトレーニングするような勉強が不足していることを強く思いますね。応用力というのは、基本的な部分を学ばないといけないのですが、そういった部分の教育が全般に足りないように思います」

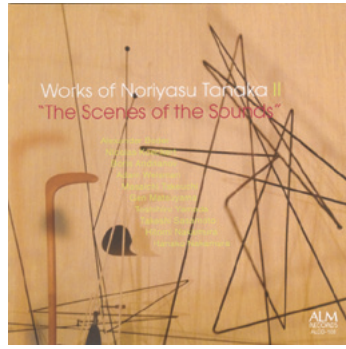
いるように思われる。「作曲というものは、基本がしっかりできていないと駄目ですね、建築みたいなもので、構造計算のしっかりできていない作品は、聴いていても作曲者の意図が伝わらないかと思えます」

優れた抽象画には、裏打ちされたデッサンの技術があることを思い起こさせる。作品には、楽器間の緊張あるやりとりとエモーショナルなフレーズが行き来する。一見対立するように見える要素が、答えを模索するように響きそして溶け合う。調性音楽と無調、洋画と日本画、デジタルとアナログ.....、すべてのアートの分野で起こっている問題を扱っていることに気付かされた。

教員著作の出版物のご紹介です。
(編集期限までに報告されたもの)



■南元子
(名古屋芸術大学人間発達学部 子ども発達学
科准教授)
『近代日本の幼児教育における劇活動の意義と
変遷』
(株式会社 あるむ)



■田中範康
(名古屋芸術大学音楽学部 音楽
文化創造学科教授)
CD『田中範康…作品集II(音の
情景)』
(ALM RECORDS)

2014年度 音楽学部演奏会スケジュール(2015年2月~3月)

- 2月**
- 第13回 歌曲の夕べ**
日 時/2月3日(火) 18:30開演予定
会 場/熱田文化小劇場
入場料/無料 (全自由席)
- 研究生修了演奏会**
日 時/2月4日(水) 18:00開演予定
会 場/電気文化会館 ザ・コンサートホール
入場料/無料 (全自由席)
- アンサンブル・フィラルモニク・ア・ヴァン**
第16回定期演奏会
指揮/ヤン・ヴァン デル ロースト
小野川 昭博
日 時/2月14日(土) 13:30開演予定
会 場/江南市民文化会館大ホール
入場料/無料 (全自由席)
- ピアノのしらべ 第19回 春のコンサート**
日 時/2月19日(木) 17:30開演予定
会 場/熱田文化小劇場
入場料/無料 (全自由席)
- 大学院音楽研究科特別演奏会**
日 時/2月20日(金) 17:30開演予定
会 場/熱田文化小劇場
入場料/無料 (全自由席)
- Kaleidoscope 2015**
日 時/2月22日(日) 16:00開演予定
会 場/名古屋芸術大学音楽学部3号館ホール
入場料/無料 (全自由席)
- オペラ公演**
日 時/2月27日(金) 18:30開演予定
会 場/千種文化小劇場
入場料/無料 (全自由席)
- 日 時/2月28日(土) 14:00開演予定
会 場/千種文化小劇場
入場料/無料 (全自由席)

- 3月**
- 第17回大学院音楽研究科修了演奏会**
日 時/3月4日(水) 17:30開演予定
会 場/三井住友海上しらかわホール
入場料/無料 (全自由席)
- 日 時/3月5日(木) 17:30開演予定
会 場/三井住友海上しらかわホール
入場料/無料 (全自由席)
- ミュージカル公演**
日 時/3月12日(木) 18:00開演予定
会 場/アートピアホール
入場料/無料 (全自由席)
- 第42回卒業演奏会**
日 時/3月13日(金) 17:00開演予定
会 場/三井住友海上しらかわホール
入場料/無料 (全自由席)

※予定につき変更になる場合がありますので、事前にご確認ください。
お問合せ先/名古屋芸術大学音楽
学部演奏課 (0568) 24-5141

チケットお取り扱い場所

- 名古屋芸術大学
音楽学部演奏課
Tel. 0568-24-5141
- 愛知芸術文化センター
B2F プレイガイド
Tel. 052-972-0430
- ヤマハミュージック
名古屋店プレイガイド
Tel. 052-201-5152
- カワイ名古屋
Tel. 052-962-3939

名古屋芸術大学2015年度入試日程

(試験日が2月以降の日程のみ掲載)

学部	入試種別	出願期間	試験日	合格発表日	
■音楽	3年編入試(後期)	1月6日~1月23日	2月6日	2月12日	
	一般A日程 社会人・留学生入試	1月6日~1月23日	2月5日・6日	2月12日	
	一般B日程 社会人・留学生入試	2月13日~3月19日	3月25日	3月26日	
■大学院音楽研究科	B日程入試	2月13日~3月19日	3月25日	3月26日	
	研究生入試	2月13日~3月3日	3月10日	3月12日	
■美術	A日程第一方式(センタープラス)	1月8日~1月22日	2月5日	2月9日	
	A日程第二方式(一般試験)	1月8日~1月22日	2月5日	2月9日	
	社会人・シニア・社会人3年編入入試	1月16日~1月30日	2月9日	2月13日	
	3年編入Ⅱ期入試	1月16日~1月30日	2月9日	2月13日	
	センター利用入試(前期)	1月19日~2月2日	センター試験のみ	2月13日	
	B日程第一方式(センタープラス)	2月20日~3月24日	3月26日	3月26日	
	B日程第二方式(一般試験)	2月20日~3月24日	3月26日	3月26日	
	センター利用入試(後期)	2月20日~3月20日	センター試験のみ	3月25日	
	■大学院美術研究科	Ⅱ期入試	1月21日~2月4日	2月12日	2月20日
		研究生入試	1月21日~2月4日	2月12日	2月20日
■デザイン	A日程第一方式(センタープラス)	1月8日~1月22日	2月5日・6日	2月9日	
	A日程第二方式(一般試験)	1月8日~1月22日	2月5日・6日	2月9日	
	社会人・社会人3年編入入試	1月16日~1月30日	2月9日	2月13日	
	3年編入Ⅱ期入試	1月16日~1月30日	2月9日	2月13日	
	センター利用入試(前期)	1月19日~2月2日	センター試験のみ	2月13日	
	B日程第一方式(センタープラス)	2月20日~3月24日	3月26日	3月26日	
	B日程第二方式(一般試験)	2月20日~3月24日	3月26日	3月26日	
	センター利用入試(後期)	2月20日~3月20日	センター試験のみ	3月25日	
	■大学院デザイン研究科	Ⅱ期入試	1月21日~2月4日	2月12日	2月20日
		研究生入試	1月21日~2月4日	2月12日	2月20日
■人間発達学部	研究生入試	2月13日~2月27日	3月6日	3月13日	
	大学入学資格審査入試	11月17日~11月28日	12月3日(第2期)試験	2月10日	
	一般A日程入試	1月6日~1月21日	2月5日・6日	2月10日	
	センター前期入試	1月6日~1月21日	センター試験のみ	2月10日	
	センター後期入試	2月13日~3月2日	センター試験のみ	3月12日	
■大学院人間発達学研究科	一般B日程入試	2月13日~3月2日	3月10日	3月12日	
	3年編入B日程入試	2月13日~3月2日	3月10日	3月12日	
	三次入試	2月11日~2月20日	3月10日	3月12日	
	研究生入試	2月13日~3月2日	3月10日	3月12日	
	■大学院人間発達学	三次入試	2月11日~2月20日	3月10日	3月12日
		研究生入試	2月13日~3月2日	3月10日	3月12日

※(注)各入試で実施されるコースや専攻の詳細及び指定校推薦など上記以外の入試については、学生募集要項を参照してください。

美術学部デザイン学部卒業制作展

第19回 名古屋芸術大学 大学院修了制作展

日 時/ 2月24日(火)
~ 3月1日(日)
会 場/ 名古屋市民ギャラリー矢田

第42回 名古屋芸術大学 卒業制作展

日 時/ 3月3日(火)~8日(日)
会 場/ 愛知県美術館ギャラリー
(愛知芸術文化センター8階)
名古屋市民ギャラリー矢田
名古屋芸術大学西キャンパス
(アート&デザインセンター)

表紙の写真

名古屋自由学院創立60周年記念事業
名古屋芸術大学オーケストラ
第32回定期演奏会 第九から

2014年12月4日に日本特殊陶業市民会館
フォレストホールで行われた演奏会の模様。
指揮 古谷誠一名誉教授、ソプラノ 加地早苗、
アルト 飯森加奈、テノール 加藤利幸、バス 伊
藤貴之。有志参加による名古屋芸術大学第九
合唱団の歌声が高らかに響き渡りました。



「名古屋芸大
グループ通信」
ウェブサイトを



発行: 名古屋芸術大学
企画・編集: 全学広報誌編集委員会
デザイン・協力: くまな工房一社
印刷: 株クイックス
発行日: 2015年1月30日

【お問い合わせ先】
名古屋芸術大学 広報企画部
〒481-8502
愛知県北名古屋市熊之庄古井281番地
電話 0568-24-0359
FAX 0568-24-0369
E-mail: grouptu-shin@nuu.ac.jp



大学基準協会の認定評価を再取得しました

本学は2011年4月に、大学基準協会の大学基準に適合と認定され、認定評価を再度取得しました。
認定期間は、2011年4月から2018年3月までです。これにより、法令化されている「第三者による認定評価」にも合格したこととなります。

※記事中のホームページアドレスは、掲載先の諸事情で転載や閉鎖されている場合がございます。あらかじめご了承ください。